

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

"オトル"ノート：モンゴルの移動牧畜をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 利光, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5638

“オトル”ノート

—モンゴルの移動牧畜をめぐる—

利 光 有 紀

I 緒 言

モンゴルの牧畜に関する、モンゴル人自身の手になる書物をひもとくと、しばしば“オトル”という語が散見される。この語は、従来から、馬群キャンプを意味する言葉として知られていた。例えば、今西は、内蒙古でみられた馬群キャンプが「オトリ」と呼ばれていたことを記し留めている¹⁾。また後藤は、馬群を見張るための仮住居がオトルである、という解釈を下している。馬群は、冬季には、宿营地から切り離されて遠隔の地に放牧される。この際に設営される馬群キャンプが、オトルとして既に知られていたのである。しかし、現在のモンゴル語文献にみられるオトルの語は、必ずしも馬群に限定して用いられているわけではない。現在ではすべての家畜種にわたる重要な放牧方法として言及されている。それらの言及にみられるモンゴルでの一般的説明は、既に吉田が紹介しているとおり、オトルには夏季と冬季との2種類²⁾があること、2種類のオトルはそれぞれ、越冬の準備として、越冬そのものとして、放牧効果が期待されていること、の2点に要約することができる。このように、オトルの語は現地において、従来の冬季の馬群キャンプの意味から、季節や家畜種を問わない家畜キャンプの意味へと拡大解釈されているようである。

それでは、一体なぜそうした拡大解釈がなさ

れるようになったのであろうか。牧畜に関連する一単語の語義の展開をめぐるこの問いは、単なる語学上の問題にとどまらず、現在のモンゴルの移動牧畜を把握する上で極めて重要であるように思われる。従来から知られている語義と現在多用されている語義とは、宿营地から家畜群を切り離す放牧という意味が共通して認められる。これは即ち、いわゆるトランスヒューマンズの意味に該当し、オトルの本質もまたそこに求められよう。そしてトランスヒューマンズであるところのオトルが指導される背景には、定住化政策があると考えられる。こうした見解について確信を得るためには、オトルに関して文献上見出しうるより具体的な事例や、より詳細な解説が整理されなければなるまい。本稿はそのためのオトルに関する覚え書きである。

なお、ここで利用するモンゴル語文献は、モンゴル人民共和国で出版されたものであり、その結果、本稿でモンゴルと言う場合は、モンゴル人民共和国の主たる構成員であるハルハ族を対象としている。但し、過去の移動に関しては資料が乏しいために、随時、内蒙古やカザフスタンなどのハルハ族周辺のモンゴル、トルコ、ツングース系諸族に関する資料を参照する。

II 馬群のオトル

内陸アジアにおける遊牧の顕著な特色として、馬群を伴うことが挙げられる。少数の騎乗用を

1) 今西錦司「砂丘越え」、『今西錦司全集第2巻』講談社、1974、293-347頁所収、330頁。

2) 後藤富男『内陸アジア遊牧民社会の研究』、吉川弘文館、1968、44頁。

3) 吉田順一「モンゴルの遊牧の根底」、モンゴル研究11、1980、39-49頁、46頁など。

除いて、なお相当数の群れを構成しうる場合には、ウマは通常遠方に放牧される。宿営地から日帰り放牧地までの距離が、ヒツジ・ヤギやウシに比べて大きいというばかりでなく、冬季には全く宿営地から切り離されて馬群キャンプが設営される。従来から知られていたオトルとは、こうした越冬遠牧のための馬群キャンプである。この馬群のオトルは、モンゴルの放牧体系或いは牧畜体系の中で、いかなる意味をもっていたのであろうか。

このオトルについて、馬群放牧の指導書は次のように記している⁴⁾。

『冬は馬群を雪が少なく、草丈が高く草量が豊富で、土の良い、短足の家畜(ヒツジ・ヤギおよびウシ—筆者注)から離れたところへオトルによって放牧する。』

また、馬群を冬季に遠牧するオトルの効果として、草の穂先を利用できること、人里離れた牧地を利用できること、他の家畜用の牧地を保護できること、の3点が挙げられている⁵⁾。ウマ以外の家畜用の牧地と、馬群を冬季に遠牧するオトル用の牧地とを分けることによって、自然草地の牧地としての利用度を高めていることが伺える。しかし、オトル用の牧地が他の一般的牧地と如何に生態的条件上区別されているかについては、先の引用箇所からは導くことができない。そこでは指導書であるという性格上、好条件が列挙されているにすぎないからである。オトル用とされる牧地の特色は、カザフ族に関する次の2つの記述から読み取ることができる。少し長くなるが、オトルの内容を端的に示しているので、原文を直訳する形でそのまま引用しておく。

『騎馬用の数頭のウマを除いて、馬群は必ず

しも冬営地に連れて来ない。馬群は数人の牧夫と共に最初の雪が降るまでは秋営地にとどめられ、然る後、夏営地に戻される。夏営地では、夏季に水びたしで蚊の多かった牧地が冬季にはたとえ悪天候でも良草を提供するのである⁶⁾。』

『冬季、小型家畜(ヒツジ・ヤギ)とウシが、また半遊牧経営体の場合にはそれらに加えてラクダが、冬用の牧地で牧される一方、ウマは通例、遠く離れた牧地へ派遣される。これは必然性に基づいている。というのは、冬用牧地の面積は限られており、各営地周辺の牧地は必ずしもウマの腹を満たさない。とりわけ植生が稀薄で低質な時はそうである。また同時に、夏用、秋用の牧地にはもちろん少なからず草が残っており、水の少ないところは夏に全く利用されていないので、冬には素晴らしい牧地となる。こうした牧地は、時には冬営地から数百 km 離れていることもあるがそこへ馬群が派遣される。中間層の牧民は、馬のオトゴン(カザフ語のオトルを翻訳したロシア語—筆者注)のために協力して、通常500～600頭の馬群を編成し、近隣の者から3～4人の牧夫を選出してその管理にあてる。富裕層は、自らの馬群をもちろん個別にオトゴンへ派遣する⁷⁾。』

これらの事例にみられるオトル用牧地は、前者の例では沼沢地、後者では砂地であると言えよう。両者の共通点は、水資源の状況に起因して夏用牧地に適さないが故に、冬季においても牧草が残っていることにある。

具体例としては、バルハシ湖南の砂漠性ステップを挙げることができる。ここは、サル・オトラウと呼ばれ、地名にオトルの語が残存して

4) Чойжилжав, Х., Адуун Сүргийг Адуулан Маллах Арга Туршлага (『馬群放牧の経験的方法』), Улаанбаатар, 1978, p. 16.

5) *ibid.*, p. 18.

6) Ford, C. D., *Habitat, Ecology and Society*, Methuen, London, 1934, p. 334.

7) Академия Наук К. С. С. Р., Хозяйство Казахов на рубеже XIX-XX веков, Алмата, 1980, p. 91.

いるようである。19世紀末から20世紀初頭にかけて、冬用オトゴン牧地として利用されていたという。⁸⁾

砂地の場合など、水場の不足や欠如は、冬季には降雪を利用することによって解決される。但し、降雪下の枯草を食させるためには除雪を行わなければならない。蹄によってかきわけることのできる雪の深さは、ヒツジでは10~12 cmにとどまるが、ウマならば50~60 cmにも達するという。⁹⁾降雪量は、指導書によれば少ない方が良くにこしたことはないが、他の家畜に比べれば多くとも構わない、といえる点もまた、馬群の冬用牧地の特徴である。例えば、エニセイ川上流のタンヌ・オーラ山中のトゥバ族に関して、馬の冬用牧地は、“snowy horse pasture”¹⁰⁾と言及されている。

冬営地を選択する際には、何よりもまず降雪量が少ないという地形的条件が先行する。そして、選択された冬営地の周辺が冬用牧地となる。しかし、馬群にとっては、牧地が宿営地に近接する必要はないし、降雪量もあまり問題とならない。冬営地から離れて馬群キャンプを設営することによって、冬営地周辺の冬用牧地の植生が保護されるばかりでなく、夏用牧地の使い残しが有効に利用される。それは結果的に、多降雪地や遠隔地の利用を果たしている。越冬遠牧のための馬群キャンプと定義できるオトルには、以上のような土地利用上のメリットがある。

モンゴルにおける過去の事例としては、次のような証言を挙げることができる。¹¹⁾

『私の祖父は1936年に83歳でしたが、「私がほんの小さな子供だった頃から、我が家では冬季に牧地を分割して利用していた。そして、植生状況のいかんによって、或る年は小型家畜と大型家畜を共に越冬させ、或る年は大型家畜(ウマ-原文注)をオトルによって遠牧に派遣していた。」と話していました。』

この事例では、馬群のオトルが自然条件の悪化に対応した臨時手段となっている。オトルは一面、天災からの逃避行としての性格をもっているといえよう。

乾燥地域の移動牧畜が抱えている問題は、乾燥そのものであるよりもむしろ、気象の変動にある。モンゴルで人口に膾炙されているのは、「申歳イチセンのゾド」と呼ばれるおよそ12年周期の雪害等であるが、現実の災害はより頻繁に発生している。突発的な大雪はともかく、長期的なガン12)(旱魃)やゾドの場合は、予め対策を講じうる。家畜群の一部を分け、設営地から離し、別の放牧地へ赴くという分派對策である。こうした家畜キャンプがオトルであり、それを分派することが、オトルする、オトルに出すと表現される。

自然条件の悪化に対して、まず大型家畜をオトルし、その移動路に沿って小型家畜をオトルする。ウマはその際、いわばラッセル車の役割を果たすといわれる。移動するに十分な体力の無い家畜は、冬営地に残されて老人や婦女子の世話をうける。とりわけゾドが深刻な場合には、大型家畜だけがオトルに出され、小型家畜は冬

8) 前注7)の前掲書の付図によれば、この一帯だけが「冬用オトゴン牧地」と記されている。

9) Федорович, Б. А., 'Природные условия аридных зон С.С.С.Р. и пути развития в них животноводство', Труды Института Этнографии им. Н.Н. Миклухо-Маклая, н.с. 48, 1963, pp.207-222, p.207.

10) Veinstein, S., translated by Colenso, M., *Nomads of South Siberia*, Cambridge University Press, Newyork, 1980, p.51~66.

11) オブス県ズーンゴビ郡での聴き取りとされる。その位置は第1図に示した。以下の事例についても同様に、第1図に示す。

Даваажамц, Ц., Х. Буян-орших, 'Элсний Бэлчээр ашигладаг зарим онцлог (砂牧地利用の若干の特色)', Шинжилэх Ухааны Амдрал 1, 1980, pp.36-42, p.40.

12) ゾドとは、一般に雪害などの冬季の天災を言う。1944-45年, 1967-68年のゾドが申歳に発生している。しかし、現実にはより頻繁であることが、史料によって裏付けられている。

原山煌「モンゴル遊牧経済の脆弱性についての覚書」, 東洋史研究41-2, 1982, 167-174頁, 171-173頁。

営地で飼料によって養われる。現在、こうしたオトルは、移動先の牧地の予備調査に基づいて期間、頭数、労働力編成などが計画されたうえで、組織的に実施される。

天災からの逃避行と定義しうるオトルの場合、対象はウマに限らない。原則として、当面の生存に不要な家畜群が、設営地から切り離されることになる。ただ、内陸アジアの遊牧においては、当面の生存に不要な家畜群としてまず挙げられるのが、馬群なのである。搾乳しない冬季は牝馬も含めて馬群を設営地付近に維持しておく必要はない。そして、植生に恵まれない冬季こそは、他の家畜群から遠ざけておくことが望ましい。逃避行としてのオトルの場合も、最も顕著であるのは馬群の越冬遠牧である。

III 羊群のオトル

オトルの語は、少なくとも元朝秘史にまで遡ることができる。そこでは、集団狩猟の際の先勢子という意味で用いられている。¹³⁾これは、集団の一部が分派されるという点で、先に述べてきた牧畜上のオトルの内容と通じている。牧畜の場合は、牧夫に導かれて家畜群キャンプ集団本隊から分派されるのである。これこそはトランスヒューマンズの本質的概念である。一般にトランスヒューマンズの用語は、牧夫のみが移動に携わる移動牧畜を意味し、家族構成員の全員が移動を共にする遊牧とは区別して用いられる。従って先述のオトルのように、牧夫のみによる家畜群の移動が遊牧において存在する場合は、あくまでも宿営地の季節的移動があるために、通常はトランスヒューマンズと呼ばない。換言すれば、宿営地が固定的であれば、同質のオトルでさえもトランスヒューマンズと呼びうる。このことは、張家口の北方 60 km にある

太僕寺旗ウチオボ村での20世紀初頭の状況を述べた次の記述から確認することができる。¹⁴⁾

『すべての家畜はなるべく集落周辺に維持されるものの、当地の牧草状態いかんによっては遠方の牧地への移動を余儀なくされることもある。遠方の牧地では、オトルとして知られている一時的キャンプが設けられる。冬のキャンプである冬営地(オブルジョー)と、夏のキャンプである夏営地(ゾスラン)の2種類のオトルだけが利用される。従っていかなる家畜群にとっても、新鮮な牧地への移動は年2回が最大限である。オトルは、ヒツジ、ウシやウマに実施されるが、家畜のタイプによって性格が異なる。ヒツジとウシのオトルは太僕寺旗内にとどまるが、ウマのそれはしばしば隣接するモンゴル旗に設けられる。後者の場合は、移動中に漢人の県の領域を犯すことになる。オトルの位置はほぼ固定しており、一般に、他人に認められている慣習的な場所が各牧戸ごとにある。

すべての家畜が毎年規則的に両方のオトルに移されるわけではない。ウマの場合、少なくともウチオボ村では、毎年冬のオトルを利用してはいたようであるが、夏のオトルはさほどでもない。搾乳期は大概、集落周辺にとどめられるからである。一般に、ヒツジとウシは夏冬いずれのオトルもウマほどには利用しない。当地の牧草がよほど不十分な状態にならないかぎり、ほとんど移動されない。従って通例オトルの利用を最も頼みにしているのは、そこそこの馬群を有する富裕な牧戸である。オトルキャンプは家族のメンバーかまたは雇われ牧夫によって維持され、数ヶ月続けられる。』

この村にはバター工場があり、牧民は定着して

13) 元朝秘史(巻6)に「逃げ回る野獸(狩り)に先勢子とされたるならば」とある。

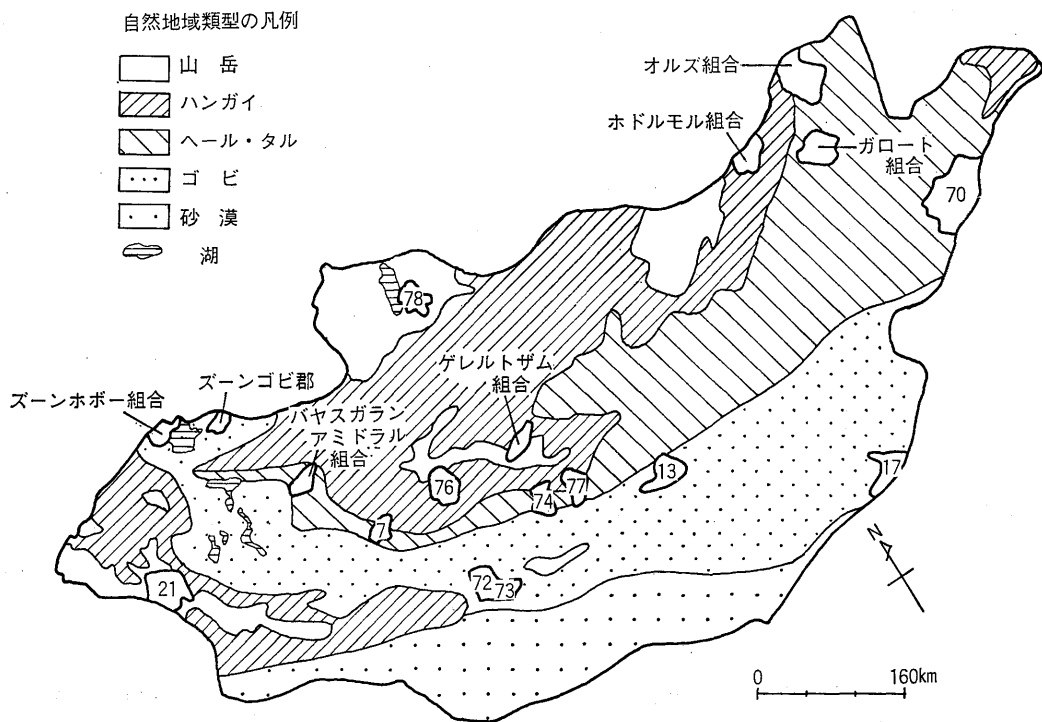
村上正二訳注『モンゴル秘史』2, 平凡社, 1972, 117頁。

14) Vreeland, H. H. III, *Mongol Community and Kinship Structure*, Greenwood Press, Publishers, Connecticut, 1957, p. 145.

いた。季節的移動は、夏冬いずれもトランスヒューマンスであり、オトルと呼ばれている。それは、なお馬群の越冬遠牧としての性格を保持している。これに対し、近年のモンゴル語文献中にみられる事例の多くは、羊群のオトルである。これはどういう意味をもっているのだろうか。馬群のオトルとはどう異なるのであろうか。

ザブハン県サンタマルガス郡バヤスガラン・アミドラル組合で始められたとされる「オルゴン・アイルサルト」¹⁵⁾と呼ばれる方式が、模範としてしばしば引き合いに出されている(例えば、注11)p.37~39, 注17)p.95)。4~5世帯およそ10戸で一組となり、晩夏に合同宿地に集合する。宿地

には、幼稚園や病院などの固定施設が仮設される。ここで、平素よりやや規模の大きな羊群を等質に編成し直し、交尾期(9月下旬~10月上旬)までの間、担当する牧民達がテントをもって放牧に出かける。残った家族は、残された家畜の日帰り放牧や飼料の準備にあたる。この場合、オトルは夏の季節的移動になっている。現在のところ、合同宿地は施設の面でも人員構成の点からも流動的であり、固定的集落ではない。従って、このオトルもトランスヒューマンスの概念と同一視するには無理があろう。しかし、その方向性は充分見出しうる。『オトルそのものは定住式牧畜ではないが、定住式牧畜への移行を示すもの』¹⁷⁾なのである。



第1図 モンゴルにおけるオトルの諸事例

15) ailsalt は動詞 ailsax 「二戸で一組になる」から派生した名詞であり、örgön は「広い」の意であるから、örgön ailsalt は「数戸で一組になること」と訳せよう。数戸の合同オトル方式および合同宿地の意味で用いられている。
 16) オトルに出す家畜を一部選択すると、群れの規模は小さくなるが、別の群れとの合併の結果、規模が拡大する。例えば、去勢羊群の場合、普通は450頭までとされる適正規模が、オトルの際には700頭にまで至っている。オトルによる規模の拡大は、すべての家畜種に認められる。
 Самбуу, Ж., Малчдал өх Зөвлөлтөө (『牧民に与ふる助言』), Улаанбаатар, 1956, p.20~21, p.75~76.
 17) Батнасан, Г., БНМАУ Дахь Нэгдэлчдийн Аж Ахуйгаа Хөтлөх Арга Ажиллагаа (『モンゴル人民共和国における牧民経済の指導方法』), Studia Ethnographica VI-1, Улаанбаатар, 1978, p.74.

モンゴルの定着化政策では、3つの地域類型（第1図参照）に応じて各々方針が打ち出されている。¹⁸⁾ハンガイ（森林ステップ地域）では、従来から1~3kmの距離を年に4~5回移動する程度であった。一ヶ所の滞在期間は2~3ヶ月と長いので、宿营地周辺に家畜を繋留しておく網（ゼル）や、家畜を帰営させる場所（ホト）を移していた。ここでは、草地農業を導入して直ちに半定住化を促すとされる。ゴビ（砂漠性ステップ地域）では、従来20~30kmの移動を年に10~18回繰り返していた。ここでは何よりもまず、ガンヤゾドなどの自然災害に備えて乾草舎の建設が急がれる。移動回数・距離ともに、ハンガイとゴビの中間であるヘール・タル（ステップ地域）では、オトルと日帰り放牧とを併用して、周年、牧地を利用し、半定住化を導くとされる。ここでは、オトルが一切の季節的移動に相当することになる。即ち、季節的移動を、家族全員によるものから牧夫のみに任せるものへと変えるオトル化が、モンゴルでいうところの半定住化である。こうした原則的方針の下にある牧畜組合（コルホーズ）の実例を以下に紹介する。¹⁹⁾

アルハンガイ県イフタミル郡は、ゲレルトザム組合の領域である。1938年に17人が68頭の家畜を持ち寄って組織した第40組合を前身とする。国庫貸付金等で家畜を購入する一方、全国レベルでの相次ぐ統廃合によって、規模を拡大した。一郡一組合の現在の体制が整ったのは1961年で、当時の集団化率は戸数にして89%であった。現在では、およそヒツジ6万4千頭、ウシ1万頭、ウマ8千頭、ヤギ8千頭、合計89,825頭の家畜を保有している。就業人口1,108人のうち、916人が牧畜に従事している。当組合は4つのブリガードからなる。各牧戸は、担当する家畜

第1表 ゲレルトザム組合のソーリ編成

（注19）前掲書による）

対象家畜 (ソーリ類型)	ソーリ の数	1ソーリに要 する労働力 (人)	1ソーリの 家畜群規模 (頭)
馬 群	27	2~3	270~360
乳牛ファーム	23	10~3	206~358
オス牛	5	2~3	180~360
オス当歳牛	4	2~3	180~230
メス当歳牛	4	2~3	180~230
種オス牛	4	1	75~100
メス羊・山羊	68	4~5	450~800
オス羊・山羊	5	2~3	500~750
オス当歳羊・山羊	7	2~3	500~650
メス当歳羊・山羊	7	2~3	500~650
種オス羊・山羊	4	2	250~320

群の構成に基づいて、ソーリと呼ばれる移動集団単位にまとめられ、いずれかのブリガードに属している（第1表参照）。

第2ブリガードに属するバグズ氏は、組合保有のウマ338頭を牧する。妻と10歳を頭とする4人の子供からなる一家で、ひとつのソーリを構成している。彼らは、2つの乳牛ファームと共に冬営する。冬は他のウマのソーリと協力して馬群をオトルする。ウマの出産期には妻も世話をし、冬の馬群の見張り役には、羊群を担当している牧民の協力を得る。夏は、搾乳に係わらない馬群を蚊の少ない高位の牧地で放牧する。搾乳用の牝馬は、日中設営地付近に放ち、夜間は他の馬群と共に放牧する。夏の夜は見張らず、主人が午前4時頃に放牧地へ出向く。妻は、搾乳期間中、午前7時から午後8時までの間に7~10回、15頭を搾る。秋には水の多い低地に放牧する。馬群は牧地に集めて夜明けまで声を掛けておく。その後放置し、再び午前5時頃に出向く。秋は牧地を転々と移らなければ植生を痛めてしまう。

また、ガルサンツェレンの一家は、労働力となる長女1人を含む子供6人の、8人家族である。ヒツジ11頭、ウマ8頭、ウシ5頭を私有し

18) Батнасан, Г., ‘Нэгдэлийн нүүдэл, суульшлан зарим асуудал (牧民の移動・定着に関する若干の問題)’, Studia Ethnographica IV-9, 1972, pp.111-157, p.124, 158.

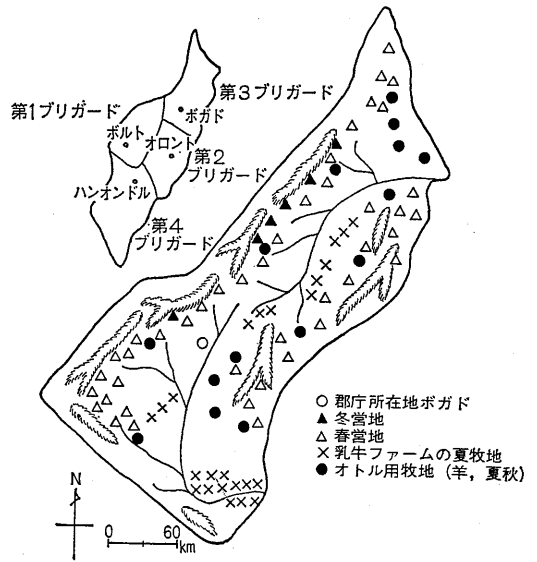
19) Цэрэнханд, Г., Нэгдэлч Малчдын Аж Байдал, 《Гэрэлт Зам》 Нэгдэлийн Материалаар (『組合牧民の生活状態, 《ゲレルトザム》組合の資料から)], Studia Ethnographica VIII-1, 1981, p.9~19.

ている。他の2つの牧戸と共に1ソーリを構成し、母ヒツジ・母ヤギ458頭とその仔畜を合わせて計1,165頭を扱う。各営地では11月末から2月中旬までを過ごし、冬営地から10km離れた春営地には5月初旬まで留まる。春営地には仔畜養育用の畜舎が設けられており、夏に準備しておいた飼料の70%をここで消費する。出産は45日間で終了させ、仔畜の世話を女性が、放牧を男性が担当する。5月初旬から6月10日までの間、このソーリは2つに分裂し、少しずつ移動する。またこの間に家畜の検診と去勢を済ませる。6月中旬、再び3戸が夏用牧地に集合する。ここでの囲いは剪毛や搾乳の作業に効を奏する。7月中旬から11月中旬までの間は、他の羊群担当者を加えて夏秋のオトルを行なう。居残りの者達は、私有のヒツジや何らかの理由で残されたヒツジの放牧にあたる。その後は、各戸が個別に冬営地へ向かって移動する。

さらにまた、第4ブリガードに属するバトツァガン氏は、乳牛ファームの主任であり、自らも放牧に携わっている。彼以外に放牧に携わる者1人、搾乳に携わる女性10人、仔牛を専門とする者1人とで、180頭の乳牛を管理する。女性1人に対して、8頭から15頭ほどの仔牛の世話も割り当てられている。搾乳者の夫達は、畜舎の建設や草刈のほか、馬群や去勢群の放牧を手伝う。

この組合では、先述した馬群のオトルとともに、羊群のオトルが並存している。羊群のオトル牧地は、春営地或いは冬営地から10kmも離れていないし(第2図参照)、また、『オトルの時は牧地を近く移転する』(注19)p.18とある。つまり、羊群のオトルは、近距離を頻繁に移動することによって牧地の集約的利用を計るものである、と考えられる。

具体的な距離については、別の資料が参考となる(注17)p.47~52。そこでは、すべての移動がオトルと「牧地移転」との2つに分類されて



第2図 ゲレルトザム組合第3ブリガード
(注19) 前掲書の原因修正)

記されている。「牧地移転」とは、例えば、冬季、簡単な越冬施設を配した冬営地を数ヶ所経巡る移動を指し、家族全員が移動する点でオトルとは区別される。第2表に、3つの組合における移動距離と回数を示した。オルズ組合、ガロート組合、ズーンホボー組合は、それぞれハンガイ、ヘール・タル、ゴビ地域に属しているものの、これらの事例が地域類型を反映する典型的なものであるか否かは確認できない。従って、各組合ごとにみられるオトルと「牧地移転」との移動形態上の相違を、各地域類型に普遍的な特徴であると主張することもできない。「牧地移転」に対して、オトルが夏季に集中している点だけが、全事例を通じて認められる(第2表参照)。

これらの3つの事例のうち、ガロート組合についてはより具体的な移動内容を知りうる(第3表参照)。一年を通じて21回移動しているが、その距離は2~12kmと短かく、いずれも半日で移動できる程度にすぎない。冬・春は出産前後にあたり、一ヶ所での滞在期間が長く続く。オトルは夏に行なわれ、同一牧地を3度まで利

第2表 オトルと「牧地移転」（注17）前掲書による）

距離の単位は km, () 内は平均値

組 合 名	自然地域類型	家蓄種	1群の頭数	オトル				「牧地移転」				1年の合計	
				季節	移動回数	移動距離	1ヶ所での滞在日数	季節	移動回数	移動距離	1ヶ所での滞在日数	移動回数	移動距離
ガロート組合	ヘール・タル	ヒツジ	1,886	夏秋	夏9, 秋1	3~12 (6.9)	3~45 (11)	冬春秋	11	5~12 (8)	5~60	21	142
〃	〃	ヒツジ		?	9	3~12 (6.8)	7~16 (11)	?	12	5~12 (7)	10~60	21	150
オルズ組合	ハンガイ	ヒツジ	1,500	5月, 8月	各1		14, 40	秋冬	7	6~25 (11)	約30	11	123
ズーンホー組合	ゴビ	ヒツジ?		夏	2	15, 27		冬春秋	4	15, 27		9	140
〃	〃	ヒツジ	750	秋	1	18		冬夏	7	22~35		10	214
〃	〃	ヒツジ	800	夏	1	28		冬春秋	6	4~25		11	139

第3表 「牧地移転」と夏のオトル（注17）前掲書による）

() 内は地名から読み取りうる地形

設 営 地 点	設営地点の性格	当地点までの移動距離	当地点での滞在日数	オトル移動によるもの
ウルジーン・エンゲル	冬営地（南斜面）	5	30	
セヒーン・ホンホル	春営地（凹地）	7	26	
タリヤート		12	32	
フルディン・アル		5	30	
アリン・ノール	(湖)	6	60	
タリヤート	夏営地	12	5	○
ホームスタイ		12	10	○
ヘルレンギーン・ホプディン・オボー		7	45	○
ホン		3	5	○
ボールジフ		5	6	○
ホルスタイ		7	20	
ボールジフ		3	5	○
ボールジフ		2	5	○
バヤンノール	(湖)	5	3	
ドロ		4	4	
ホンホル・ノール	秋営地（湖）	12	20	
バヤンゴリン・アダク	(湖岸)	12	3	
ノーフティン・オハー	(丘陵)	4	5	
ノギン・オハー	(丘陵)	5	30	
ウルジート・アル		9	16	
ウルジート・オブル		5	5	

第4表 ゾド対策マニュアルにみえるオトル（注20）前掲書による）

空欄は不明箇所

資料番号	自然地域類型	家蓄種	1群の頭数	季節	移動回数	1ヶ所での滞在日数
7	ヘール・タル	ラクダ	500以上	11月以降	4	
13	ゴビ	ヒツジ		5~10月	10~13	10
17	ゴビ	ヤギ		夏		
21	山岳	ヒツジ		夏 秋		
70	ヘール・タル	出産後のヒツジ		4/20~11/30	20	9~10
72	ゴビ	ヒツジ		夏 秋		7
73	ゴビ	ヒツジ		夏		3~7
74	ヘール・タル	ヒツジ		夏 秋		
76	ハンガイ	ウマ		周年		
77	ヘール・タル	ヒツジ		7月		
78	山岳	ヒツジ		冬 春		

用している。牧夫のみが家畜群を連れて頻繁に移動することによって、牧地の集約的利用が果たされている。

オトルが頻繁な移動として重視されていることは、雪害対策マニュアルからも読み取ることができる。そこに収録されているオトルの実例を第4表にまとめた²⁰⁾。そのほとんどが羊群を夏に頻繁に移動させるものである。夏の頻繁な移動によって、家畜の肥育を促し、厳寒の際にも一頭の損失さえ無かったという。馬群の越冬遠牧に関連して述べておいたように、オトルは逃避行として直接的なゾド対策になりうるものである。しかし、このマニュアルでは、オトルの事例全体を通じて、逃避行としての効果よりも牧地を集約的に利用する効果の方が強調されていると言えよう。

このような頻繁な移動としてのオトルが、ヘンタイ県ホドルモル組合では、舎飼いよりも勧められている²¹⁾。この地方では従来オトルが行なわれておらず、1955年よりヒツジの夏秋のオトルが始められ、翌年からウシにも応用されたという。

『家畜を遠方の初めてのオトルの牧地に、畜舎や囲いなしに移動させることは、常にそれらを使い慣れた家畜や牧民にとっては難しいことであるが、馬車にテントを積み、水、沼沢の少ない良草地に従って移動し、ひとつの牧地に5日以上留まらないように牧地を換えてオトルする。』(傍点筆者)

舎飼いは生活様式と生産様式の定着化をもたらすと考えられる。しかし、生産様式について

は、繰り返し述べてきたように、自然草地での頻繁な移動が重視されている。牧民によっては以前にも増して頻繁に移動するようになった、ともいう²²⁾。現在の指導書等に収録されているオトルの実例をみる限り、「頻繁に移動せよ」という土地利用の集約化をめざした命題は顕在している。このような、生産様式のいわば移動化は、社会的・文化的サービスを受容するために必要な定着化と、決して矛盾するものではない。それどころか、以前にも増して頻繁に移動するからこそ、「定居点」は必要なのである。「牧地移転」と称されるオトル以外の移動もまた頻繁な移動ではある。しかし、生産様式の移動化と生活様式の定着化とを同時に可能ならしめるのは、牧夫のみが移動に携わるトランスヒューマンズであろう。だからこそ、オトルが奨励されているのである。

より包括的な牧畜指導書では、すべての家畜種があらゆる季節にオトルに出されることになっている²³⁾。しかし、馬群のオトルを除くと、見出しうる実例は、以上の引用に示したとおり、羊群の夏のオトルばかりであると言っても過言ではない。また、現在入手し得た最近刊の牧畜指導書では、とりわけヒツジ・ヤギについてのみに重点的にオトル方法が解説されている²³⁾。それによると、先のオルゴンイルサルト方式の他に、さらに「放牧地に宿泊させて肥育するオトル」「順番に肥育するオトル」と命名された2つが加えられている。前者は、主として去勢畜・仔畜を対象とし、7日以上一ヶ所に留めない夏のオトルである。合宿体制を採らず、単独の

20) Чойжилжав, Х., Зудын Тухай Зарим Асуудал ба Малчдын Туршлагаас (『ゾドに関する若干の問題と牧民の経験から』), Улаанбаатар, 1968, p. 41~84.

1967年から1968年春の雪害における経験談が84件聴取されており、うち11件がオトルに関連する。なお、表内の番号は原文のそれを踏襲しており、各件の位置はこの番号によって第1図に示した。

21) Жалцан, Ч., Пүрэбдорж, П., Хөдөлмөл нэгдэл (『ホドルモル組合』), Улаанбаатар, 1956, p. 12.

22) Humphrey, C., 'Pastoral nomadism in Mongolia: The role of herdsmen's cooperatives in the national economy', *Development and Change* 9, 1978, pp. 133-160, p. 157.

23) 例えば, Монгол Орны Вилчээрийн Мал Маллагааны Арга Туршлага (『モンゴル国の放牧的畜産の経験的方法』), Улаанбаатар, 1966, p. 112~115 など。

24) Арвий, Ц., Мал Маллагааны Арга (『牧畜方法』), Улаанбаатар, 1981, p. 51~54.

移動集団単位のままオトルを行なう点で、オルゴンアイルサルトと区別されているようである。後者は、出産後の母畜を対象とし、100～150頭の小グループごとにオトルをして約10～14日で宿営地に戻り、これを順次繰り返すものである。7月は搾乳盛期に入るから、その間常に一部を宿営地に残し搾乳しうるように考慮している点が「順番に」という命名に反映されている。おそらく第4表の70番の事例がこれに相当するであろう。従来搾乳の主要な対象であったヒツジが、搾乳期であるはずの夏に一部ずつながらも宿営地から切り離されていることは、飼用目的がより肉・毛へと特化していること、即ちランチング化を暗示している。また、頻繁な移動が要求されていることは、自然草地における放牧があくまでも重要な肥育手段であることを表わしている。定着化が進行しつつある中で、現在の移動牧畜が放牧の畜産業であることを、羊群の夏のオトルが象徴しているように思われる。

IV 結 語

牧畜に関する限り、オトルとは牧夫のみによる家畜群の移動を意味する。これは、トランスヒューマンズの本質的な概念に相等しい。但し、トランスヒューマンズは遊牧とそれ以外の移動牧畜とを区別する概念として用いられるし、一方、牧夫のみによる家畜群の移動は遊牧とも並存しうる。従って、オトルはトランスヒューマンズ的な移動というべきものである。トランスヒューマンズ的であるが故に、オトルは定着化に寄与している。そしてその結果、オトル自体は、季節的移動に加えたトランスヒューマンズの移動から、季節的移動にとって代わるそれへ

と変わりつつある。

従来から顕著にみられたのは馬群のオトルである。ウマはそもそも生産に必須の家畜ではないし、とりわけ冬季は搾乳されることもないので、宿営地から切り離されても構わない。冬用牧地の保護という観点からみれば、切り離され、遠牧されることが望ましい。これによって、水と草との分布が一致しない自然草地の欠点を逆に利用することができる。現在でもこうした性格をもつ馬群のオトルは行なわれているが、新たに顕著にみられるのは、羊群のオトルである。宿営地から切り離され、頻繁に牧地を移ることによって、土地利用の集約化が計られている。

モンゴルでは、冬のオトルと夏のそれとに季節的に2分して把えられているが、両者はそれぞれウマ、ヒツジで代表させることができる。ところで、指導書の但し書きには、『オトルは遠くである必要はなく、近くでもよい。』とある(注17) p.101)。もはや遠くである必要は無くなった、と読み直せる。この形態上の変化は、遠ざけられることの本質が、もはや物理的距離にはなく、宿営地から切り離されることだけへと変わることを意味する。宿営地から切り離され易いのは、生存に当面不要な家畜であり、例えば非搾乳用家畜である。本来は馬群であったのが、羊群に移りつつある。換言すれば、牧民にとっては羊群そのものが、生存に当面不要な家畜と化しているわけである。馬群のオトルから、羊群のオトルへという変遷に、遊牧から放牧の畜産業への変貌を伺うことができよう。

生活様式の定着化と生産様式の移動化とを同時に担っているオトルは、現在のモンゴルの移動牧畜を語る上での鍵概念である。

(京都大学・院)

Nomadic Pastoralism in Mongolia

Yuki TOSHIMITSU

The Mongolian word *otor* means a herding camp separated from a home base camp. The movement of animals to the herding camp is also called *otor*, and is directed by the herdsman only while other family members remain at the home base camp. So, we can translate the core meaning of *otor* as referring to transhumance.

While sedentarization is necessary for pastoral nomads to obtain social and cultural services, they are forced to move more often than they previously did in order to intensify the use of pastures. It is transhumance or *otor* that enables them simultaneously to achieve a sedentary life while changing pastures frequently to increase production. In recent years, sedentarization is changing the form of *otor* journeys from extra movement added to seasonal ones between summer and winter camps into more purely seasonal ones around temporary settlements.

Until recently *otor* of horses has been the most popular. In winter, except for a few kept for riding, horses are not necessarily kept near the home base camp. And they are ideally taken far from the home base camp to reserve pastures for other animals. In winter when the conditions of pastures deteriorate, it is more desirable to remove the horses away than in any other season. From descriptions about Inner Asian pastoral nomads, we can cite many examples of *otor*, which refer to the herding of horses to distant pastures separated from winter camps. Winter *otor* of horses usually exploits the pastures not suitable for summer use, for example those which are swampy or sandy.

Natural hazards, known as *zod* (blizzard) or *gan* (drought), often cause *otor* journeys to distant pastures.

In addition to these *otor* journeys, another type of *otor* is becoming prominent. This is frequent movement of sheep herds at short intervals and short distances in summer, in order to intensify the use of pastures. Manuals about pastoralism and sedentarization cite many instances of this type of *otor*.

A form of *otor* known as *örgön alisalt* is projected as a model in these manuals. About 5 households, each head of which controls the same kind of animals, come together to the base camp. Herdsmen take animals to pastures leaving family members at the base camp, which is now a settlement though not permanent. Wives and elders take care of sick or weak animals which have been left behind.

The manual about overcoming problems of *zod* records 11 cases of *otor*, most of which are summer herding of sheep. They emphasize that frequent movement in summer resulted in overcoming severe winter weather without a loss of animals, due to their improved health.

One case of this is *otor* of ewe herds after lambing. They are separated from the base camp even in summer. This case suggests that milking of ewes is diminishing and that sheep raising is being specialized for mutton and wool, while cattle husbandry is mainly

dairy farming. This type of *otor* is the symbol of change from pastoral nomadism into stock farming which still retains nomadic characteristics.

Otor is a key word in understanding the present realities of Mongolian pastoralism: